



Title	大学の地域とのかかわり : がいなんよ大学 in のむらと復興支援酒「緒方洪庵」の取り組み
Author(s)	川端, 亮
Citation	未来共創. 2023, 10, p. 193-218
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/92507
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学の地域とのかかわり

がいなんよ大学 in のむらと復興支援酒「緒方洪庵」の取り組み

川端 亮

要旨

愛媛県西予市野村町野村地域は 2018 年の西日本豪雨で被災した過疎地域である。私たち大阪大学人間科学研究科のグループは一般社団法人 NEO のむらを組織し、野村地域の復興の支援を行ってきた。本稿では 2021 年と 2022 年に実施された二つのプロジェクトを紹介する。一つ目は、愛媛県のえひめ南予きずな博の中で行われた「がいなんよ大学 in のむら」の取り組みである。2 年間で 9 回の講演会や落語会などを行った。二つ目の取り組みは、復興を支援するために日本酒「緒方洪庵」を委託して醸造・販売し、野村の知名度を高めるとともに、野村を知っている人たちには少しでも支援してもらい取り組みを続けた。これらの取り組みを通じて、大学が地域にかかわるということはどういう意味があるのかを考えた。第一にほかの組織と異なり大学には、高度で多様な専門的知識があるので、それらを活用できることが特徴である。第二に大学生という地方においては貴重な若者を活用することができ、地域の若者を活性化することもできることを具体例を挙げながら指摘した。

目次

はじめに

1. 「よそ者」から NEO のむらへ
2. がいなんよ大学 in のむら
3. 日本酒「緒方洪庵」の復活
4. 「緒方洪庵」第二弾 (BY2021)
5. 大学が関わるということ

おわりに

キーワード

がいなんよ大学 in のむら
日本酒「緒方洪庵」
大学生
えひめ南予きずな博

はじめに

大都市圏、特に東京への人口集中が進み、日本の多くの地域で過疎化、高齢化が進行している。2021年の東京の人口の流出入を総務省の人口動態調査で見ると、転入者等が834,739人、転出者等が821,898人で、東京都の社会増減数は12,841人とプラスである¹。コロナ禍で一時的に東京流入者数が減り、流出者数が増えたとはいえ、東京の社会増減数は依然としてプラスである。一方で本稿で対象地域として取り上げる愛媛県西予市野村町野村地区の2023（令和5）年1月31日の人口は、4,569人で²、2022（令和4）年1月の4,686人³と比べても人口は100人程度減少しており（1年間でおよそ2%）、西予市全体でも2004年から2019年の15年間の人口減少率は20.4%と大きく⁴、将来推計（基準値）では2019年の37,248人が2060年には16,224人に減少するとされる。

人口が減少するとさまざまな施設も統廃合される。野村は、明治時代から野村（村）町として独立した地方自治体であり、商店街に人通りも多く、製糸工場があって全国有数の生糸の産地としても栄えていた。しかし、旧野村町の人口は、1958（昭和33）年の22,922人をピークにその後は減少し（野村町誌編纂委員会 2009:45-46）、2004年には東宇和郡宇和町・城川町・明浜町と西宇和郡三瓶町と合併して西予市となった。西は宇和海に面し、東は四国カルストの一部である大野ヶ原が含まれ、標高1,403メートルまでの高低差のある東西に細長い範囲が一つの西予市となったのである。野村町の支所は2022年10月24日に新築のきれいな建物となったが、一方では地域の高校の統廃合も人々の話題に上っている。今後、行政サービスや教育環境の低下が問題となるかもしれない。

愛媛県にある四年制大学は県庁所在地の松山市に4大学とその周辺に1校があるだけである⁵。野村町は、松山からおよそ80キロ離れており、野村から松山市の大学への通学は難しい。つまり高校を卒業し、進学をする場合には野村町を離れ、都市部に移動することになる。吉川（2023）が描く島根県の高校生が高い県外進学志向を有しているのと同じである。そして大学進学だけではなく、高校への進学でも地域から高校生が流出する傾向にある。かつて

は野村高校に進学していた生徒たちも、近年では宇和島や八幡浜方面に高校進学するケースもある。その結果、地域の野村高校も決して容易に生徒を確保できているわけではない。このように日本の過疎化が進む地域の多くは大学がなく、学びの機会が制限されており、また地元高校生たちは大学生というロールモデルを身近に見る機会も制限されている。

このような野村地域に大阪大学という大学がかかわることの意義を、一般社団法人NEOのむらの活動を事例に考察してみたい。

1. 「よそ者」からNEOのむらへ

過疎化が進行していた野村町は、2018年7月の豪雨により、肱川があふれ、町の中心部の両岸が浸水するという大きな水害に遭った。野村町全域で全壊、半壊、床上浸水423棟(そのうち野村町野村が351棟)で、5人が命を落とした(令和元年11月西予市災害対策本部運用改善検討会 2019:19, 20)。大阪大学人間科学研究科の有志の教員を中心として「緒方らぼ」という研究グループを結成し、2020年3月に野村地域自治振興協議会(以降自治振)と愛媛大学社会創学部と連携協定を調印し、2021年3月13日に一般社団法人「NEOのむら」に発展させて、野村町の復興を支援してきている。2018年から2020年初めまでの動きは川端・佐藤・宮前(2020)に詳しいが、ここではその概要を紹介する。

被災1か月後から人間科学研究科の佐藤功が野村町の災害の復興のためのボランティアに参加し、緒方酒造を訪問するようになる。大阪大学は緒方洪庵が創設した適塾を精神的源流としており、その緒方洪庵と緒方酒造は姻戚関係にある。その縁からも支援できないかと佐藤が申し出たところ、当時の緒方酒造当主だった緒方レンさんは喜んで受け入れてくれた(川端・佐藤・宮前 2020:83)。それを受けて2018年12月に大阪大学のメンバーが緒方酒造を訪れた際に、緒方さんから、蔵本体は全面的に残し、蔵を野村のまちのためにアカデミックな形で、有効に使えないかと相談を受けた(川端・佐藤・宮前 2020:84)。大阪大学のメンバーは、地元や愛媛大学の方々と共同での取り組みを提案し、承諾を得た。「以降、『緒方酒造支援』とともに『緒方酒造蔵を中心とした野村のまちづくり』に関与することになる」(川端・佐藤・宮前

2020:84)。

2019年3月に自治振の清家卓さんとNPO法人シルミルのむらのメンバーに両者の活動について聞き取りを行い、大阪大学側のこれまでの緒方酒造とのやり取りも踏まえて、協力関係を築く(川端・佐藤・宮前 2020:84)。2019年5月に愛媛大学社会共創学部 of 松村暢彦教授を訪問し、西予市における愛媛大の活動の中でも西予市が主催し、愛媛大学とタイアップした「野村復興まちづくりデザインワークショップ」について教えていただいた。また緒方家を訪問し、緒方家に残る系図『緒方家譜』を拝見し、「緒方洪庵の備中・佐伯家の『家系別伝(佐伯家系譜)』と重ね合わせ、松永准教授が共通点を解説」(川端・佐藤・宮前 2020:85)した。

大阪大学のメンバーは、野村地域で行われている軽トラ市、のむラブミーティングや「放課後子ども教室」、野村地域のまち歩き巡検、N-ジオチャレの活動なども機会があるたびに見学した。2019年9月には野村地域の相撲神事である「薬師大相撲」を見学し(川端・佐藤・宮前 2020:87)、このころまでに自治振と大阪大学とで共同して「緒方らば」という名前で活動していくことが合意され、毎月1回程度ミーティングを持ち、活動していくことになった。そして11月の乙亥大相撲の前日に、「緒方らば」主催で、「緒方酒造」「緒方洪庵と大阪大学」「乙亥相撲」をからめた講演会を企画し、野村訪問時に緒方家に提案し、緒方家も了解された(川端・佐藤・宮前 2020:87)。2019年11月25日、「緒方らば よい・まち講——文化としての“お酒”そして“相撲”」を開催し、松永准教授の日本酒と相撲に関する講座が行われた。会場の緒方の蔵では、日本酒の1升瓶6本を入れるプラスチックのケースをさかさまにして置き、その上に座布団を敷いた座席80席がほぼ満席となる盛況であった(川端・佐藤・宮前 2020:88)。翌日からは野村公会堂で2日間、乙亥大相撲が開催された。例年の会場である乙亥会館は、水害の際に水没したため、使用することができなかった。そのため、野村公会堂に臨時の土俵をしつらえて、大相撲が実施された。2020年1月には、自治振と愛媛大学社会共創学部と大阪大学オムニバス協定(OOS協定)を同時に結ぶこと、協定締結時に協定を記念した第1回の「緒方らば」イベントを開催することになった(川端・佐藤・宮前 2020:88-89)。しかしながら2020年1月からの新型コロナウイルス感染症の拡大により、調

印式は2020年3月13日に行われたが、本家緒方蔵での「第1回よい・まち講」は、感染が収束するまで延期となった(川端・佐藤・宮前 2020:89-90)。

2. がいなんよ大学 in のむら

2-1. えひめ南予きずな博でのシンボルイベントの構想

2020年9月に入って、愛媛県から2021年に行われるえひめ南予きずな博の一部への協力の依頼があった。えひめ南予きずな博は、愛媛県が企画した水害からの復興博である。2021（令和2）年は、2018（平成30）年7月豪雨から3年目にあたり、特に被害が大きかった大洲市、宇和島市、西予市でそれぞれシンボルイベントを実施するという計画が立てられた。その一つとして西予市のシンボルイベントにおいては、「緒方らば」との連携の要望がNEOのむらの代表理事であり西予市の産業部係長でもある清家卓さんを通じて伝えられた。

災害後の取り組みについて、愛媛県からヒアリングがあり清家さんが「緒方らば」について概要を報告していた。旧緒方酒造の蔵を拠点に、文化的なワークショップやセミナーなどを連続的に開催するようなプランが、えひめ復興博のプロデューサーである宮本倫明さんから持ち込まれた。他の2つのシンボルイベントを開催する大洲市、宇和島市が、有名人を呼んだライブを行ったり、大きな公演を企画すると伝えられたが、それに対して、西予市の「緒方らば」が加わったシンボルイベントでは、地域に根ざした、後につながる企画を行うという条件ならば引き受けてもよい、ということになった。

2020年9月15日、大阪大学人間科学研究科で佐藤、宮前、川端がえひめ復興博のプロデューサーである宮本倫明さんから、文化的なワークショップやセミナーなどの具体的な構想を聞き、どこまで「緒方らば」が自由に企画できるのかを尋ねた。その後、2020年9月27日、再び、宮本さんとお会った。自治振と大阪大学のメンバーの初顔合わせを行い、9月28日、愛媛大学社会共創学部において、宮本さんのほか、愛媛県職員3名、愛媛大学松村暢彦教授、渡邊敬逸准教授、のむら自治振清家卓さん、高岡伸次さんと大阪大学(佐藤、宮前、川端)が顔合わせを行い、えひめ復興博で緒方らばのかかわり方に

ついて、検討、打ち合わせを行った。その中で、オンライン大学の構想⁶が出た。そこからさらに検討が進み、「がいなんよ大学 in のむら」という名称で、対面を中心にオンラインも使って講演会を中心とするイベントを2か月に1回程度行い、それを2021年度に限らず2022年度以降も継続する、という方向で、愛媛県に協力することになった。

実施主体は自治振、愛媛大学社会共創学部、大阪大学人間科学研究科であり、この三者からなるNEOのむらの会合で協議しながら、「がいなんよ大学 in のむら」の企画を進めることとなった。コンセプトとして「温故挑新〜うすれつつある「きずな」を学び、新たな「きずな」で地域課題に挑む〜」を掲げ、遠方のおおさか大学、同じ県内のおおさか大学よりは近いがそれでも少し遠い愛媛大学と、地元の野村が連携し、学術的にも実践的にも学ぶ機会を創り出す企画を継続的に実施することとした。これらの企画の実施によって、地域で積極的に活動している自治振のメンバーの学びや成長にいくらかでも貢献するのみならず、高校生等の次世代を担う若い世代の気づき、学びにも貢献することを目指した。高校生以下の世代にとっては、少し上の年代、特に大学生との交流の機会が極端に乏しい。おおさか大学や愛媛大学の大学生が地域外からではあっても若い世代と交流することによって、大人では与えることのできない刺激を受けることが生じると考えた。これが「観光以上、定住未満」の「関係人口」のメリットの一つである。えひめ南予きずな博のタイトル通り、きずなを中心に据え、関係人口を増やすことによって、地域課題の解決、担い手不足の解消などの地域活性化につなげることを目的とした。

「がいなんよ大学 in のむら」は当初は4つの企画を考えていた。一つは「全国高校生まちづくりサミット」で、野村のN-ジオチャレ⁷が鯖江市で実施された2020年の「全国高校生まちづくりサミット」に参加したことが縁で、それを野村で実施したいという企画であった。そのほかにNEOのむらを構成する野村地域自治振、愛媛大学、おおさか大学のそれぞれが、1つずつ企画を行い、きずな博で4つの企画を実施しようと考えていた。

えひめ南予きずな博は、2021年度に実施予定であったが、2021年6月14日に愛媛県知事が「集客を伴う主要イベント等については来年度に延期をする」と発表し、2021年度は「地域内外との絆の強化に向けた準備期間」と位置

づけることになった⁸。これを受けて緒方らぼでは2021年度の企画は基本的には対面では行わないプレ実施とし、2022年度は2021年度の内容を受けて4つの企画を本格実施することになった。

2-2. 2021年度のプロローグ企画

2021年7月23日15時から17時まで「えひめ南予きずな博プロローグ企画 がいなんよ大学 in のむら」オンライン開講第1講「関係人口と地域づくり」が開講された。記念すべき第1講では、『関係人口の社会学』を2021年4月に出版した島根県立大学地域政策学部の田中輝美准教授に「関係人口と地域づくり」をテーマに講演をしてもらった。

野村地域では前日の7月22日から8月22日まで、1か月続く「えひめの竹

えひめ南予
きずな博

地域に暮らすからこそ、
伝えられることがある。

島根県立大学准教授・ローカルジャーナリスト
田中 輝美

えひめ南予きずな博プロローグ企画
がいなんよ大学 in のむら オンライン開講 第1講

講演会
関係人口と地域づくり

7. 23[金・祝]
15:00から17:00

西予市野村町
本家緒方蔵より
Zoomにて開催

関係人口の社会学
人口減少時代の地域再生
田中輝美

**住む人が減ったら、
地域は再生できないのか？**

「関係人口をめぐって」の著者が「関係人口の社会学」の基礎から定義し、その役割を論じた本邦初の「関係人口の研究書」！
事例と新たな理論の枠組みによって関係人口を位置づけ直し、人口減少時代の地域再生の方向性を示す
大阪大学出版会

緒方らぼ（のむら自治振・愛媛大学・大阪大学）
Mail: ogatalab@hus.osaka-u.ac.jp

Zoomでの参加ご希望の方は左のQRコードからお申し込みください。

図1 がいなんよ大学 in のむら第1講

あかり」のイベントが始まった。乙亥会館駐車場下で大小さまざまな穴を多数あけた竹筒の中にろうそくの火を入れた灯りや、電球を中に入れ、球体状にした竹細工で飾られており、焼きおにぎり、ソーセージ、かき氷、タンドリーチキンなどの販売も行われた。野村での地域のイベントにひき続き、翌23日にがいなんよ大学が始まったのである。旧緒方蔵の会場は、野村地域などに在住する方々44名が参加し、講演者の田中さんや島根県の地域で活動している方々、大阪大学の教員などをオンラインでつないで講演と質疑が行われた。田中さんが紹介した「観光以上、定住未満」で継続的に地域にかかわれる人という関係人口の考え方は野村地域の人々の関心を引く内容であった。講演後の質疑では、「参加者から関係人口を増やすための方策について質問があり、田中さんは『魅力だけではなく、課題解決に努力する地域の姿を示すことが効果的だ』と述べた」⁹。

その後23日17時過ぎから日本酒「緒方洪庵」の記録映像上映会を行った。この時上映した動画は、2020年秋より本格的に企画が動き出し、此の友酒造に醸造を依頼し、2021年4月にお披露目された復興支援酒「緒方洪庵」の完成までの道のりを、記録映像として編集した15分ほどの動画である。

がいなんよ大学 in のむら第2講は、自治振の企画として、2021年8月4日13時半から14時半まで「ITつながり講座」として開講された。講師として大阪大学基礎工学部出身の2人組ユーチューバー、「はなおでんがん」¹⁰に来てもらい、YouTube講座「のむらっ子にYouTubeの授業をしてみた」が野村小学校体育館で開催され、67名が参加した。小学校で開催したのは、現在は小学生までSNSが浸透しているからである。

ベネッセコーポレーションが発表した「2020年小学生の出来事や将来に関する小学生の意識調査」の結果によると小学生男子ではなりたい職業の1位にゲームクリエイター・プログラマー、2位にユーチューバーとなっており¹¹、「2022年の出来事や将来に関する小学生意識調査」では、ユーチューバーは男子の1位となるなど¹²、近年は上位に「ユーチューバー」がランクしている。異質の人とすぐに連絡が取れるSNSでのつながりのメリットは、社会関係資本の上でも大きい。しかし、さまざまな犯罪の報道を見るまでもなく、異質な人がもたらすデメリットも当然あるので、それを理解し、効果的な情報発信を学ぶこ

とは子どもにも大人にも必要である。

「はなおでんがん」は、前日に野村高校を舞台に、自分たちのチャンネルにアップするための動画制作を行った。野村高校の協力のもと、高校生が先生になり、先生たちが生徒役となった授業の動画は、高校生の熱演のためか、770万回の再生(2023年2月9日現在)という驚くべき人気を集めた¹³。

2021年9月19日がいなんよ大学 in のむら第3講として「全国高校生まちづくりサミット in のむら」が実施された。当初の計画では全国各地から高校生を野村に招いてサミットを行う計画であったが、コロナの影響で、高校生の移動や宿泊が難しく、野村とオンラインで岡山の#おかやまJKnoteを結んでの開催となった。参加人数は32人で、高校生が主体となって運営したが¹⁴、大阪大学の大学生も積極的に支援し、まちづくりに取り組んでいる高校生たちの情報交換会となった。高校生視点のまちづくりの課題や活動の問題点などを共有することで、新たな気づきが生まれ、今後のイノベーションにつなげていくことができる機会となったと考えられる。

2021年11月13日はがいなんよ大学 in のむら第4講「防災に関する学び／防災を通した学び」が愛媛大学を中心とした企画として実施された。京都大学の矢守克也教授のズームによる講演と野村小学校の防災教育の取り組みの実践報告、愛媛大学の井上昌善准教授が「市民性育成を目指す防災学習の開発ー神戸・松山の防災学習を事例としてー」と題してお話いただき、野村の会場では小学生も含めて約30名が参加した。矢守教授は、玄関まで行きつのが大変な方々を対象とした玄関まで出てくる避難訓練の紹介や、アプリなども使ったユニークな避難訓練を紹介され、防災を通して、家族とは何か、地域社会とはなんだろうか、自分の人生ってどんなもんなんだろうか、と学びを広げていくことが一番大切であると話された。小学校ではオンラインで復興ソングを制作する取り組みが紹介され、歌をすることで子どもたちが復興にかかわっていると感じ、社会性や主体性をはぐくむことにつながる取り組みであったと報告された。井上准教授のお話では、避難ルートの作成を例に、子どもの考え方と消防署の人(専門家)の考え方の違いを示し、子どもの考えにも大人の想定を超えていた点もあったことが紹介された。

がいなんよ大学 in のむら第5講は、「ノムライクなつどい」として、落語会

を開催した。コロナの第6波がほぼ終息した2022年3月26日、笑福亭笑利さんの緒方洪庵を題材とした創作落語の初演と日本酒「緒方洪庵」第二弾の完成披露、試飲会が行われ、35名が緒方蔵に集まった。まず桂九ノーさんの「時そば」で場内が笑いで暖まったところで笑利さんの「緒方洪庵～医の種」が始まった。枕を含めて1時間を超す熱演であった。笑利さんは2018年の災害時にボランティアとして野村町を訪問し、その後もいくつかの行事で野村を訪問しながら災害復興を支援していた。野村で大阪大学のメンバーと出会い、歴史上の人物の創作落語を行っている笑利さんに大阪大学側が「緒方洪庵」の落語を創作していただくことを依頼して、この日に至った企画である。ただ、依頼後にコロナ禍が長く続いたため、なかなか上演に至らなかったが、2022年の日本酒「緒方洪庵」第二弾のお披露目とともに落語「緒方洪庵」が初披露され、絶好の機会となった。

2-3. 2022年度がいなんよ大学 in のむら

コロナは相変わらず流行したり収まったりを繰り返していたが、2022年度は予定通りにえひめ南予きずな博が2022年4月24日から12月25日まで正式に開催された。

2022年5月7日にがいなんよ大学 in のむら第6講として、『『関係人口いっぱい地域』に学ぶ～北から南から先進事例～』を実施した。2021年の第1講で講演をお願いした島根県立大学の田中輝美准教授にコーディネーターをお願いし、3名の方をお招きし、それぞれの経験談をお話いただいた。岩手県野田村から久慈広域観光協議会の貫牛利一さんにお越しいただき、東日本大震災での野田村の被災の状況とそこからの復興について話していただいた。支援を受けた団体の連合体であるチーム北リアスの活動に触れながら、そこから生まれた震災後の交流に重点を置いて、野田村の現在までを語られた。大潟松橋ファームの松橋拓郎さんは八郎潟を干拓した秋田県大潟村の比較規模の大きな農家の長男で、松橋さん自身（とその仲間）が作った酒米で、日本酒を醸造する農醸というプロジェクトの活動を報告していただいた。兵庫県洲本市よりお越しの洲本市役所企画情報部企画課の高橋壺さんは、地「域」と大「学」の連携である域学連携に長くかかわっておられる。総合大学がない

淡路島で平成25年度から域学連携事業に取り組み、10年目になる活動について報告があった。9年間で、20校から約680名もの大学生が洲本市を訪れ活動している。学生滞在拠点の改修、地域貢献型発電所の設置とその売電利益を活用した地域活性化事業などの説明とともに、やりたいこと、面白いことを身の丈に合った規模感で、疲れてしまわない程度にやる、という秘訣も披露された。その後、会場の参加者64名と3名のスピーカーと田中准教授とでディスカッションが行われた。

2022年8月20日は、がいなんよ大学 in のむら第7講として、「ITつながり講座」の2回目として、「はなおでんがんの『ねえ！万バズのむら！』」が行われた。参加人数は42名でTwitterを使い、参加者が野村のまちを歩き回って、写真を撮ってツイートする、一人3ツイートまでという制限で始まった。暑い中、参加者は1時間歩き回り、2時半から「はなおでんがん」による講評が行われた。最優秀賞は、はなおさんによって、野村地域青年団のツイートが選ばれた。

2022年9月23日から25日にかけてがいなんよ大学 in のむら第8講として「全国高校生まちづくりサミット2022 in のむら」が開催された。浦河高校（北海道）、inspire（岩手）、Up to You！（兵庫）、飯野高校（宮崎）、宇和島市まちづくり課（愛媛）、#おかやまJKnote（岡山）、宇和高校（愛媛）（と主催者のN-ジオチャレ（愛媛））からそれぞれ4名程度の高校生と付き添いの教員や自治体職員などのほか、野村地域の住民なども含めて80名の参加があった。メインテーマは18歳成人でサブテーマは防災であった。このサミットは企画から実施まで基本的にN-ジオチャレの高校生が主導し、実行委員長はN-ジオチャレの高校生が務めた。当日はN-ジオチャレの高校生が司会をしながら、各地から集まった高校生たちが段ボールベッドの組み立て競争やワークショップ、災害の跡をめぐるまち歩きなどを行った。自治振のメンバーが高校生の食事の準備や力仕事などを全面的にバックアップしたほか、大阪大学と愛媛大学の大学生が伴走者として加わり、成功裏に終わったと言えるだろう。

がいなんよ大学 in のむら第9講として2022年10月15日に「復興支援を語り合うー大学の伴走者の地域との向き合い方を考えるー」を実施した。田中尚人熊本大学准教授と柴田祐熊本県立大学教授にお越しいただき、愛媛大学の

松村暢彦教授がコーディネートして、災害復興での活動についてディスカッションを行った。参加人数は40名であった。田中准教授は『まちづくり』と
いわない、まちづくり」を提唱し、日々当たり前、無理せずにやるまちづくり、
変わり続けながら行う Sustainableという考えを紹介された。柴田教授は、
地域とのかかわりの3タイプを紹介され、住民主導とは何か、どういう活動
かなどを話された。

これらの「がいなんよ大学 in のむら」の講義はすべて、10分程度の動画に
まとめられ、YouTubeに「ノムライクチャンネル」¹⁵としてアップされている。
これらの実施において、本来は1年で4回行われるがいなんよ大学の企画がコ
ロナによって1年目はプレ開講、2年目が本番の実施となり、合計9回の講演
会等を実施した。当初の4回から9回へと倍以上に回数が増えたために、限ら



第9講 がいなんよ大学 in のむら

がいなんよ大学とは、大学と地域が連携してつくる市民の学びあいの場です。セミナーや講演会などさまざまな機会を通して、
地域を盛り上げていく人材を育て、地域外の人や若い世代との交流することで、のむらにさすな人口を増やしていきます。

災害復興を語り合う

～大学の伴走者の地域との向き合い方を考える～

各地の災害復興・復興には、さまざまな形で継続的に支援している大学関係者がいます。それぞれの
関わり方なでの喜びや難しさなど伴走者の本音で語ります。フロアの皆さんとも意見交換しながら、
地域の伴走者としてどのように地域に向き合っていくべきなのか考えたいと思います。

2022

10/15 (土)
15:00～16:30



田中 尚人 准教授
熊本大学大学院
先端科学研究部

専門は景観デザイン、土木史、土木
計画。平成28年熊本地震からの
復興で益城町に継続的に関与。

柴田 祐 教授
熊本県立大学
環境共生学部

専門は農村計画、地域計画、
景観計画。九州豪雨の復興
で球磨川流域の市町に関与。



松村 暢彦 教授
愛媛大学
社会共創学部

専門は土木計画、地域計
画、交通計画。西日本豪雨
からの復興で野村町に関与。

実施方法

・西予市野村町
本家緒方蔵での現地参加
50名
・Zoomによるオンライン
(事前登録制)
50名

参加料

無料

申込締切

10月10日(月)

申込方法

参加ご希望の方は、氏名、所属、
メールアドレスを右記のQRコードまたは
はメールアドレスからお送りください。
後日、必要事項を返信します。
[お申し込み・問い合わせ先]
matsumura.nobuhiko.bc@chime-u.ac.jp



内容

ディスカッション

災害復興での活動の紹介
田中尚人准教授 (熊本大学)
柴田祐教授 (熊本県立大学)
松村暢彦教授 (愛媛大学)

伴走者としての本音

コーディネーター 松村暢彦

主催

野村町地域自治振興協議会
えひめ南予さすな博実行委員会
一般社団法人NEO0005

図2 がいなんよ大学 in のむら第9講

れた予算で実施するのは苦しいところがあった。

十分に予算が出せなかった点の一つが大学生の交通費である。第3講、第8講のまちづくりサミットは高校生が中心に行ったが、その裏方の支援は相当な量であり、ここに大阪大学と愛媛大学の大学生が協力してくれた。次代を担う高校生たち、彼らはもちろん自分たちだけでできることは限られているが、しかし一方で大人の言うとおりに従わないし、従うだけでは主体性が育たない。その点でも一緒に考え行動する大学生の支援は重要であった。そのほかにも第4講の司会や、第7講においては、参加者が町に出てツイートする様子の実況中継などを大学生に担ってもらい、年齢の高い教員等ではできない盛り上がりに一役買った。

当初の1年分の予算で2年分の企画を遂行するのは厳しかったが、大学の研究費や科研費などで補える範囲で企画を遂行した。しかしながらそうはいつでも通常の大学の研究で行える研究費よりは金額が大きく、制約の少ない形で予算を使用できたことは、がいなんよ大学の企画が充実した一因である。

きずな博の実施主体の愛媛県からは、おもに3人の職員が参加して、毎月NEOのむらのメンバーと打ち合わせを行って、企画を進めていった。まったく制約がなかったわけではないが、県とNEOのむらの話し合いにより、比較的円満に協議は進んだと言えるだろう。最も問題があったのは広報ではなかっただろうか。NEOのむら側のチラシの作成や広報の準備が十分に早く準備されていなかったこと、県側のプレスリリースのタイミングなどと合わせにくいことなど連携に問題があった。またNEOのむらは、より広範囲の広報を県に期待しているところがあったが、県側は広報をNEOのむらの責任と考えていたという齟齬があり、広く広報ができたとは言えないだろう。たとえば、えひめ南予きずな博について、松山空港には宣伝ののぼりがいくつか立っているが、それだけであり、伊丹空港にはまったく宣伝もなく、大阪できずな博を知っている人はほとんどいなかっただろう。このようにきずな博の認知を高めるための広い範囲での広報が、特に県外では効果的に行われておらず、関係人口を増やすためのがいなんよ大学の試みにとっては、広報的には期待した効果が得られなかったといえるだろう。

3. 日本酒「緒方洪庵」の復活

NEOのむらの取り組みでもう一つの重要な柱は、復興支援酒「緒方洪庵」を製造委託し、販売していることである。

2020年度に入って、コロナの影響が次第に大きくなり、大阪から愛媛へ行くことは、実質的に不可能となっていた。大阪大学のメンバーは、拠点である緒方酒造が廃業して生産されなくなった「緒方洪庵」という日本酒の復興に力を入れることになった。「緒方洪庵」復興の過程は、松永（2021）に詳しいが、ここではその概略を紹介しよう。

緒方酒造は1753（宝暦3）年に創業した老舗の造り酒屋であった。日本酒や焼酎を製造販売していたが、1991（平成3）年に緒方洪庵の生誕180年を記念して大吟醸「緒方洪庵」の仕込みを開始し（松永 2021:136-138）、2017酒造年度¹⁶（2017BY）まで作られていた。緒方酒造は「緒方洪庵」を商標登録しており、これを大阪大学に譲渡してもらった。川端が大阪大学の関連各部署と交渉し、最後は西尾章治郎大阪大学総長から了承を得て、大阪大学（実際の運用は人間科学研究科）が譲り受けることができた。普通の商標とは異なり、大阪大学にとっては大きな看板である「緒方洪庵」の商標なので、時間がかかったのである。お酒の醸造先を探すのも、つてがなく大変であった。産業科学研究所から出た阪大発のベンチャー企業であるビズジーンの開発邦宏社長に朝来市の此の友酒造を紹介していただいた（松永 2021:145）。此の友酒造は、これまた1690（元禄3）年創業という古くからある酒蔵で、但馬杜氏の伝統を受けつぐ。この勝原誠杜氏は非常に優れた杜氏であり、此の友酒造のような小規模な蔵では受賞が難しい全国新酒鑑評会で、1回だけでなく8年連続（2020年は予審のみ）で金賞を受賞している。勝原杜氏により、酵母は大阪大学にゆかりのあるきょうかい6号酵母を用い、酒米は精米歩合58%の全量兵庫県産の山田錦を使った純米吟醸酒が作られることになった（松永 2021:146）。当初は全量火入れ酒にする予定であったが、勝原杜氏の強い勧めがあり、400本だけを生酒として出荷し、残りの約1,000本を火入れ酒とすることになった。お酒はすべて4合瓶に詰められた。

日本酒のラベルや包装のデザインに関しては、大阪大学の広報課にあるク

リエイティブユニットの協力を得ることができた。松永准教授がこれまでに一緒に仕事をしたことがあるクリエイティブユニットの伊藤雄一准教授に依頼して、実現した。ラベルの「緒方洪庵」の文字は松永准教授が適塾記念センター所蔵の緒方洪庵自筆の文字を複写し、それを利用した。また、西日本豪雨以降の日本酒「緒方洪庵」の復活までのストーリーをA4用紙の片面に印刷し、もう一方の面には日本酒のラベルと同じデザインを印刷し、熨斗に見立てて酒瓶に巻きつけた(松永 2021:147)。ボトルの色は瑠璃色で生酒の表ラベルは白を基調に銀のキャップ、火入れ酒は黒を基調にし、ブルーのキャップとなった。復活した銘酒「緒方洪庵」は、4月10日に野村の緒方蔵で、13日に大阪大学人間科学研究科で完成報告会を行った。

3月1日から4月30日までクラウドファンディングを実施した。「復興支援！

銘酒『緒方洪庵』を復活させ、野村のまちづくりを応援したい」というプロジェクト名で行ったところ、300万円強の支援が集まった。返礼品には「緒方洪庵」を充てていたが、そのラベル張り、熨斗を撒く作業、緩衝材を撒く作業、箱に詰めて宅急便で発送するまでの作業は、5月8日に大阪大学人間科学研究科で行った(松永 2021:151-155)。当日は、ビズジーンの職員、大阪大学の事務職員、学生の協力が得られ、作業は予定より早く一日で終わった。

クラウドファンディングとともに4月からはインターネット上とFAXでの注文を受け付け、販売したほか、京阪百貨店と大学生協にも卸して販売してもらった。販売当初から大変好調な売れ行きで、6月末にはほぼ完売となった。

4. 「緒方洪庵」第二弾(BY2021)

4-1. 会員制度による販売

緒方洪庵第二弾は、第一弾(2020BY)と同じく此の友酒造に委託して2021年末に醸造が開始された。酵母は第一弾と同じきょうかい6号酵母であるが、酒米は変更となった。第一弾では酒米は最高級の兵庫県産山田錦を全量使用し、純米吟醸酒として作られた。第一弾を醸造した此の友酒造の勝原誠杜氏は、きょうかい6号酵母はほかの酵母と比べて吟醸香がそれほど立たないため、吟醸酒として作るよりも純米酒にしたほうがよいのではないかという考えを

持っていた。そして酒米も兵庫の新しい酒米である兵庫錦がよいのではないかと提案を受けた。阪大側は純米吟醸酒から純米酒へ、山田錦から兵庫錦へ、というのはグレードダウンであり、それで皆さんに買っていただけるのかという心配の声もあったが、勝原杜氏の「兵庫錦で純米酒の方がきょうかい6号酵母の力を発揮させることができる」という言葉を信じてお任せした。2022年1月29日に上槽された第二弾は、「香りよりも味」と感じさせられ、お米の味がよく引き出された予想以上に素晴らしいお酒に仕上がっており、大阪大学のメンバー一同大変喜んだ。

日本酒のラベルは表示すべき内容やその文字のフォントの大きさまで細かい制限が多く、税務署の許可を経て初めて、瓶に貼って出荷することができる。第一弾の時には比較的簡単に税務署の審査が通り、同じラベルで大丈夫だと思って税務署の審査を受けたところ、いくつかの表示について修正を求められ、ラベルの確定までに予定よりも2週間ほど要し、その分、発売が遅れることになった。

第一弾は生酒の評判がよかったため、第二弾は生酒の本数を増やし、火入れ酒が約1200本程度、生酒が1050本程度の本数とした。

第一弾ではクラウドファンディングを行ったが、予想外に労力を要したこと、プラットフォームに支払う手数料がかなりの額になることなどから、第二弾ではクラウドファンディングは実施しないことにした。そして、非営利型一般社団法人「NEOのむら」を通じたのむら支援の基盤を固めるために、その趣旨に賛同していただけるNEOのむらの会員を募ることにした。会員の種別は以下の6種類である。

この会員制度の特徴は、会費に応じて、日本酒「緒方洪庵」の配布本数が異なるほか、NEOのむらが開催するイベントへの優先参加、イベントスタッフになれる権利、会員限定イベントに参加できる権利などを種別に応じて付与し、会員が野村地域へ少しでもかかわれる機会を持たせようという意図を含んでいる。

この会員制度は、ホームページとチラシで広報を行った結果、きずな町民お気持ち会員が7名、ノムライク会員が17名、ノムラブ会員1名、よもだ株主2名、半株主会員9名、リスク共有型大株主15名の合計51名の会員を集め

NEOのむら会員種別

	会費／年	メルマガ	イベント優先参加	イベントスタッフ	会員限定イベント	緒方洪庵 生酒庵	緒方洪庵 酒粕庵	のむら ふるさと産品	緒方洪庵 会員価格で購入
きずな町民 お気持ち会員	¥3,000	○	○						
ノムライク会員	¥12,000	○	○			2本	1個	※3	○
ノムラブ会員 (スタッフ会員)	¥20,000	○	○	○	○	2本	1個	○	○
酒が飲めるぞ 「よもだ株主」 ^{※1}	¥60,000	○	○	○	○	13本	1個		○
半株主	¥30,000	○	○	○	○	6本	1個		○
リスク共有型 大株主 ^{※2}	¥100,000	○	○	○	○	1本	1個		○

※1:「よもだ」は南予のことばで「酔っ払い」

※2:2022年11月、第二弾「緒方洪庵」が順調に売り切れた場合、出資金100,000円が全額返還。2022年11月、在庫量に応じて、「現金・お酒」併用での返還。

大量に在庫が生じた場合は、お酒720ml 瓶 48本(配当酒込み)での現物返還。

※3:緒方洪庵と酒粕、またはのむらふるさと産品

ることができた。

当初は第一弾で販売していただいた京阪百貨店と生協で販売を始めた。生協では免許の関係で販売は吹田にある阪大生協本部前店に限られたが、3月の発売から4月末まで「緒方洪庵第二弾発売記念キャンペーン」と銘打ってチラシを作成し配布していただいた。ビズジーンが醸造した日本酒「發」、「HATSU」と「緒方洪庵」のセット販売を行うなどして、3月に52本、4月に24本を売り上げた。やはり卒業式のシーズンが最もよく売れ、ついで入学式シーズンも卒業式シーズンほどではないが、それなりによく売れる時期であることがわかった。それ以降も5月16日から6月18日まで父の日キャンペーン、8月はサマーキャンペーンと生協には販売に力を入れていただき、合計110本の売り上げがあった。

4-2. 「緒方洪庵」の販売によるネットワークの広がり

大阪大学人間科学研究科を卒業し現在はJALで勤務している吉田さんは、NEOのむらの活動とJALをとりもってくれたキーパーソンである。JALの松久保さん、J-AIRの高橋さんなどとの協力を取り付け、JALとJ-AIRの協力の下、いくつかの企画が実施された。

JAL関係では、ホテル日航大阪を紹介していただいた。ホテル日航大阪はNEOのむらの活動に賛同していただき、「緒方洪庵」を日本料理「弁慶」で2022年5月1日より提供していただいた。また、ホテルの会場をお貸しいただき、6月26日(日)に笑福亭笑利さんの創作落語「緒方洪庵～医の種」を上演した。これは3月に野村で上演された創作落語をバージョンアップしたもので、大阪の人にも見てもらおうと行われたものである。当日はまず10時半から適塾で松永准教授と西川哲矢研究員による解説による適塾見学会を実施し、午後から日航ホテル大阪の孔雀の間で笑利さんの落語会を参加者56名で聞いた。後援や協力いただいたJALやJ-AIR、さらに(この後で触れる)愛媛県大阪事務所などから景品をいただき、抽選会も行った。その後に日本酒の「緒方洪庵」の試飲、販売会も行い、「緒方洪庵」は65本の売り上げがあった。

この催しでは、6月13日に大阪大学からプレスリリースをし、21日に産経新聞、毎日新聞が事前に記事にいただいたおかげで、21日以降、当日の



図3 緒方洪庵～医の種

参加申し込みが急増した。

J-AIRの関連では、7月9日(土曜日)と10日(日曜日)に伊丹空港で開催された「ITAMI空の市」で「緒方洪庵」の販売を行ったことが挙げられる。空の市はコロナで旅客が激減した航空会社の対策の一つで、朝、地方を出発する飛行機に地域の特産品を積んで伊丹空港に戻り、伊丹空港で午後から販売会を行うという企画であり、2020年11月30日に第1回目が始まった。2022年度に4回開催予定のうちの一回に「緒方洪庵」の販売を入れていただいた。7月9日、10日も12時から14時ごろまではお客さんも多く、入場制限がされるほどであった。それ以降はスムーズには入れるくらいであったが、人が途絶えるということはほとんどなく、その中で「緒方洪庵」はどちらの日もほぼ40本、2日間合計で80本近くを販売することができた。JALの松山空港からの便の出発前などには、愛媛県在住の方が声をかけてくださるということも何回かあった。

そのほか、JALでは、伊丹空港保安検査場内のJALショップSORA DELIで7月上旬から8月末まで「緒方洪庵」を販売していただき、伊丹空港内のJALのラウンジ（サクララウンジとダイヤモンド・プレミアムラウンジの両方）での「緒方洪庵」販売のチラシの掲示も行った。また、JALの機内誌SKYWARD8

月号に「緒方洪庵」の紹介記事を掲載してもらうなど、JALとJ-AIRには多面的に協力していただいた。

愛媛県大阪事務所は地下鉄四つ橋線肥後橋出口すぐにある。そこに近畿愛媛県人会の事務局が置かれている。つてがあって愛媛県大阪事務所の副所長とコンタクトを取り、2021年4月2日に大阪事務所所長、近畿愛媛県人会事務局長と佐藤と川端がお会いすることができた。そこで、NEOのむらによる西予市野村町の支援の取り組みや日本酒「緒方洪庵」などについて説明を行い、今後の協力をお願いした。愛媛県大阪事務所では愛媛県の物産品を販売しており、日本酒も置いているが、「緒方洪庵」は兵庫県の此の友酒造のお酒であるため、大阪事務所では販売できなかった。しかし、近畿野村高校同窓会に紹介の労を取っていただき、近畿愛媛県人会の会報『近畿と伊予』に1ページ、カラーで「緒方洪庵」の紹介記事を書かせていただいた。それによって近畿愛媛県人会の会長にも「緒方洪庵」を知っていただき、購入いただいた。2022年度から副所長、所長が異動となったが変わらず大阪事務所からはご支援いただき、第二弾の発売にあたって県人会の皆様にはチラシを配布していただいた。さらには事前の打ち合わせを経て、2022年6月6日に近畿愛媛県人会の副会長で、エイチ・ツー・オー商業開発株式会社の今井康博社長とお会いすることができた。今井社長は、個人的にも「緒方洪庵」を大量に購入していただいたほか、阪急百貨店の支店マルシェで販売できるように取り持っていた。その結果、8月末には阪急百貨店各支店の販売分を合わせて火入れ酒168本、生酒168本の合計336本の注文をいただいた。9月18日には学生メンバーが千里阪急、西宮阪急、高槻阪急に出向き、「緒方洪庵」を直接来店するお客様に販売した。人間科学研究科に近い千里阪急百貨店では18日一日で在庫が完売した。

その他に特記すべきは、2022年9月23日の朝日新聞朝刊の「天声人語」に「緒方洪庵」だけを取り上げた記事が掲載されたことである。これは朝日新聞から取材の申し込みがあり、記事にさせていただいたもので、掲載された23日は朝の7時から11時半までの3時間半で20本、25日までの3日間で35本の「緒方洪庵」購入申し込みがホームページを通じてあった。ホームページ上の販売では短期間で最もよく販売できたケースであり、全国紙の、特に注目されることが

多い「天声人語」の影響力を実感させられた。また東京在住の緒方洪庵直系の緒方洪章さんの娘さんが「天声人語」を見て、連絡を取ってくださり、2022年11月19日には佐藤と川端が東京のお宅を訪問し、日本酒「緒方洪庵」を大変喜んでいらっしゃるのとお話を伺った。このほかにもお酒の販売を通して多くの酒蔵やいろんな業種の方々と知り合い、支援していただけたことは大変ありがたい経験である。

ホームページを通じての一般への販売は2022年3月29日から始まり、11月23日までで火入れ酒105本、生酒124本、酒粕21個を売ることができた。人科の教職員あるいはそのついで協力していただいた方も多く、それらの方からは100本近くの支援をいただいた。

さまざまな方々にご協力をいただいたおかげで、2022年11月末に完売の目途が立ち、12月3日の大阪大学人間科学部創立50周年記念パーティで62本を販売し、翌4日の全国人間科学ネットワーク設立の記念懇親会で、集まった全国の人間科学部の方々や大阪大学関係者、2日間のシンポジウム等への参加者などに残り14本を試飲していただき、すべて完売となり、NEOのむら会員のリスク共有型大株主にも出資金のすべてを返金することが可能となった。

5. 大学がかかわること

地域の支援を行う団体は数多い。その中で大学がかかわるということは特別にどういう意味があるのかを考えてみたい。

第一に大学は専門知を有することが挙げられる。大阪大学のような総合大学であれば、文系理系を問わず、さまざまな専門領域の専門家がいる。お酒だけに限っても、醸造、ラベルのデザイン、販売の戦略や事務などの多様な専門家がいる。これらの大学内の多くの人々の助けがなかったら日本酒「緒方洪庵」の醸造、販売はできなかったであろう。しかしながら一方で、専門知という教員同士の協力が十分であったかといえ、なかなか難しい面もあった。大阪大学の専門知をさらに結集すれば、より大学としてのかかわりを深め、幅広く取り組むことができるだろう。

第二に大学は、大学生という若者が所属している機関である。大学生は過

疎化が進む地域にはほとんど存在しない資源である。また、大人たちと高校生をつなごうる年代ということも大きい。さらには、ホームページやブログなどの中高年ではもはや扱うのが難しい知識を持っている。かつては専門の業者に発注しなければならなかった「緒方洪庵」の販売ページやチラシなどもそれらの作業を支援するサイトを利用すれば比較的簡単にできてしまう。そういう能力にも長けた人材が大学生の中に数多くいる。がいなんよ大学 in のむらの企画においても日本酒「緒方洪庵」の販売においても大学生の力なくしては、できなかったであろう。しかし、一方で大学生は本業が学業であり、個別に部活などの大学生活もある。なかなかコンスタントにこのような社会貢献活動に加わることができないというジレンマがある。この一年の間でも広報すべき時期に広報の資料が整わない、などの苦境に陥ることはしばしばであった。

一方で大学だからこそ、気をつけなければならないこともある。渥美・石塚（2023）においては、コミュニティの尊厳ある縮退について論じているが、そこでは「よい生」を全うすることが強調され、外部圧力による「活性化」には強く警鐘をならしている。渥美・石塚が主として論じているコミュニティと野村では、コミュニティのライフサイクル上の位置づけが大きく異なるが、気をつけるべき点においては共通点がある。行政のイベントは、一歩間違えると外部圧力による「活性化」となりかねない。同じように大学がかかわることも多くの人たちにとっては「上からの」「権威主義的な」「外部からの」「圧力」と感じられることがしばしばであろう。私たち大学のよそ者が加わった「がいなんよ大学 in のむら」の取り組みも、もろもろの圧力による「活性化」とならないようにと心がけた。そのために、野村の人たちとの話し合いを重ね、野村の人たちの意向や考えを尊重し、企画案を考えていくという当たり前のことをこまめに繰り返し実施し続けた。

おわりに

日本酒「緒方洪庵」が復活し、復興がお酒として目に見える形で具現化したことは、野村のまちづくりにとってプラスであり、復興の過程にある野村の

人たちにとって、励みになったことであろう。水害以前と同じように緒方の蔵が存続し、新たにアカデミックな形で利用できる体制を整え、よい・まち講を開いたことも復興の一つの形として具現化したと言えるだろう。そしてこれらの目に見える形が愛媛県の職員の目に留まり、がいなんよ大学につながっていった。過疎化する地域で復興に至る道は遠く長い。短期的な努力で済むものではない。継続していくには日本酒「緒方洪庵」を毎年製造し、販売するという作業を続け、毎年完売するという喜びを伴うことも重要なものかもしれない。

注

- 1 令和4年1月1日住民基本台帳人口・世帯数、令和3年(1月1日から同年12月31日まで)人口動態(都道府県別)(日本人住民) https://www.soumu.go.jp/main_content/000829119.xlsx (2023/2/26 アクセス)
- 2 愛媛県西予市地区別世帯人口調べ、令和5年1月31日現在(日本人と外国人) <https://www.city.seiyo.chime.jp/material/files/group/13/tikubetu0501.pdf> (2023/2/26 アクセス)
- 3 愛媛県西予市地区別世帯人口調べ、令和4年1月31日現在(日本人と外国人) <https://www.city.seiyo.chime.jp/material/files/group/13/zenntaikyuutyoubetu1gatumatu.pdf> (2023/2/26 アクセス)
- 4 第2期西予市人口ビジョン https://www.city.seiyo.chime.jp/material/files/group/7/seiyo_jinko_vision_2.pdf (2023/2/26 アクセス)
- 5 そのほかに人間環境大学のキャンパスの一部が松山市内にあり、岡山理科大学のキャンパスの一部が今治市内にある。
- 6 この時にはオンラインの大学の構想があった。オンラインで講演会を実施し、受講料を徴収する。講演内容は録画し、受講料を支払った人はいつでも見ることができる、などが構想されたが、そのような事業には発展していない。その後の検討で、実際にはきずな博では対面の講演会を中心とすることになった。しかしながらコロナの影響で2021年度はオンラインを中心に行うことに変更されたが、2022年度は対面を中心に実施した。
- 7 N-ジオチャレは、現在は、野村町の高校生で組織するまちづくりを考えるグループである。野村高校の高校生を中心に野村地域からほかの地域に通学する高校生も所属している。もともとは、地域全体で高校生に限らず子どもの成長を見守る活動をする団体として出発し、より幅広い活動を行っていた。
- 8 「えひめ南予きずな博」の会期等の見直しに関する知事発表の要旨について <https://www.>

- pref.ehime.jp/h14500/kisyahappyou/kizunahaku.html (2023/1/7アクセス)
- 9 2021年7月31日愛媛新聞9面より。
 - 10 はなおとでんがんの二人組である「はなおでんがん」は、大阪大学では特に人気があるYouTuberである。近年、大阪大学の1年生の中には、はなおでんがんの出身校であるから大阪大学を受験した、という学生もいる。
 - 11 ベネッセ教育情報サイト<https://benesse.jp/juken/202101/20210106-3.html>より (2023/2/6アクセス)。
 - 12 ベネッセ教育情報サイト<https://benesse.jp/juken/202212/20221201-1.html>より (2023/2/6アクセス)。
 - 13 【怖すぎ】先生と生徒を逆にして生徒に授業させたら先生圧倒する神授業炸裂したwww <https://www.youtube.com/watch?v=Dwy8DfY3-ok> (2023/2/6アクセス)
 - 14 サミットは野村高校の高校生と宇和高校三瓶分校の高校生が中心に運営した。
 - 15 「ノムライクチャンネル」<https://www.youtube.com/@user-ok5cf6fv7l>
 - 16 酒造年度BYは、通常の会計年度とは異なり、7月1日から翌年の6月30日までである。緒方酒造が2018年7月に被災した時に販売されていた最後の吟醸「緒方洪庵」は2017BYであり、大阪大学が復活させた「緒方洪庵」第一弾は2020BY、第二弾は2021BYとなる。

参考文献

渥美公秀・石塚裕子

2023 「尊厳ある縮退に関する理論的準備と展望」『未来共創』10、pp. 163-191

ベネッセ教育サイト

2021 「小学生がなりたい職業ランキング『ユーチューバー』は男子2位、女子4位」
<https://benesse.jp/juken/202101/20210106-3.html> (2023/2/6アクセス)

2022 「【小学生がなりたい職業】1位は3年連続『ユーチューバー』」
<https://benesse.jp/juken/202212/20221201-1.html> (2023/2/6アクセス)

川端亮・佐藤功・宮前良平

2020 「関係人口論からみる大学の地域とのかかわりー西予市野村地域における事例」『大阪大学人間科学研究科紀要』47、pp. 75-94

吉川徹

2023 「地方における人口社会減の「生態系」ー島根県の困難」『未来共創』10、pp. 143-162

松永和浩

2021 「銘酒『緒方洪庵』復活プロジェクト」『適塾』54、pp. 135-162

野村町誌編纂委員会

2009 『野村町誌(完結編)』西予市

令和元年 11 月西予市災害対策本部運用改善検討会

2019 「平成30年7月豪雨における西予市災害対応に関する検討報告書―市の災害対応の記録 及び 今後の防災対策の在り方と改善の方向」

<https://www.city.seiyo.ehime.jp/material/files/group/4/houkokusyo.pdf> (2023/2/8 アクセス)

西予市

2023 西予市 「人口・世帯数の推移」

https://www.city.seiyo.ehime.jp/shisei/toukei_opendata/toukei/jinkou/index.html
(2023/2/8 アクセス)

2020 「第2期西予市人口ビジョン」

https://www.city.seiyo.ehime.jp/material/files/group/7/seiyo_jinko_vision_2.pdf
(2023/2/8 アクセス)

総務省

2022 「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数 令和4年1月1日現在」

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/daityo/jinkou_jinkoudoutai-setaisuu.html (2023/2/9 アクセス)

Universities' involvement in local communities

Gainanyo University in Nomura and the Japanese Sake "Ogata Koan" to Support Recovery from Disaster

Akira Kawabata

Abstract

The Nomura area of Nomura-cho, Seiyō City, Ehime Prefecture, is a depopulated area which was hit and damaged by the torrential rains in western Japan in 2018. We, a group from the Graduate School of Human Sciences at Osaka University, organized NEO Nomura, a general incorporated association, and have been supporting the reconstruction of the Nomura area. In this article, we introduce two projects carried out in 2021 and 2022. The first was the "Gainanyo University in Nomura" held within the Ehime Nanyo Kizuna Expo in Ehime Prefecture. Nine lectures and rakugo storytelling sessions were held over a two-year period. The second was an activity to commission a sake brewery to brew "Ogata Koan" sake to support reconstruction efforts, and sell it to promote the name of Nomura and encourage those who know Nomura to support the town in any way they can. Through these efforts, we considered the meanings of Universities' involvement in the community. First, unlike other organizations, universities have advanced and diverse expertise that can be utilized to serve society. Second, as we argued, citing specific examples, universities can utilize university students, who are valuable young people in local communities, and can activate the attitudes of young people in the community.

Keywords : "Gainanyo University in Nomura," Japanese Sake "Ogata Koan,"
University students, Ehime Nanyo Kizuna Expo